

平成23年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ヒグチ ケンイチロウ
氏名 樋口 謙一郎

研究期間 平成23年度

研究課題名 北東アジア諸国・地域における高等教育の英語化に関する比較研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	樋口謙一郎	文化情報	准教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

本研究では、グローバル化と、それと並行して進行する近代的な社会政治体制の崩壊・綻びによって、世界的に英語使用の機会が拡大している現状を踏まえ、北東アジア諸国・地域の高等教育の英語化（例えば、英語による教授、英語教材の受容と利用、卒業試験における英語力考査）の現状を分析し、それが域内で相互に及ぼす影響を考察する。本研究では、特に韓国、中国（台湾、香港を含む）および日本の高等教育における英語化に関する施策と実態を比較的に検討し、社会編成や人々の文化的アイデンティティの変動に関する共通性と特殊性を明らかにすることを旨とする。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

・関連の基礎資料（日本語、英語、韓国語、中国語）の収集・分析を行い、日本、韓国、北朝鮮、中国、香港、台湾の高等教育の英語化の現状を把握し、それが人的交流や対外認識に及ぼす影響をもたらしているのかという点について検討する。また、中国、韓国において、研究者、大学生・大学院生、企業関係者などにヒアリングを行う。

・中国・韓国の大学の研究者の協力を得て研究を進める。研究の中間成果を書籍として刊行するほか、学会誌、国際学会で発表することを検討している。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

従来の研究において、北東アジア諸国・地域の人々は、グローバル化による言語的葛藤を経験し、また母語環境や言語選択による経済的・教育的格差の顕在化という共通の課題を抱えており、この意味において教育の英語化は重要な社会言語学の問題の一つと言える。従来、政治体制や言語ナショナリズムの関連から、高等教育における国語・公用語の比重が大きかった国でも、近年、文系・理系を問わず講義・教材・論文執筆・卒業試験などにおける英語使用の比重が高まっており、かような高等教育の英語化は、人々の就業観や社会階層構造、さらには留学のあり方にも影響を及ぼす。他方で、中等教育修了段階で英語力が相対的に低い者には高等教育の機会も狭くなり、その結果として、格差の構造が現在のみならず将来世代においても固定される可能性もある。また、そもそも国語や公用語に英語を採用していない国々においては、英語力の有意性への疑問が提起されたり、英語力を身に着けること自体が目的化してしまったりするという問題もみられる。

以上の認識を踏まえて、本研究の期間中、各種文献の研究とともに、韓国での現地調査や、中国・香港などの研究者、大学関係者へのヒアリングを行ってきた。本研究の成果は、2012年度以降、相次ぎ公表される予定である。目下、北東アジアのことばと社会にかかわる書籍の執筆・編集を進めているところであり、このなかで本研究に関する成果や、このテーマにかかわりの深い論稿を収録することになっている。また、随時、新聞論説などにおいて、研究の一端を紹介していく。

また、本研究で培った知見と研究者ネットワークを活かして一層の研究を推進すべく、来年度以降に向けて競争的外部資金の応募準備を進めている。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①高等教育	②英語化	③北東アジア	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他○名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

- ・(著書) 樋口謙一郎編著『北東アジアのことばと社会』(仮題)、大学教育出版、2012年8月刊行予定
- ・(論文) Higuchi Ken'ichiro and Kwong Yan Kit, Language Use and Language Policy in Modern Hong Kong: Development of Multilingualism and Its Influences, 『椋山女学園大学研究論集』第43号(人文科学篇)、2012年3月刊行予定